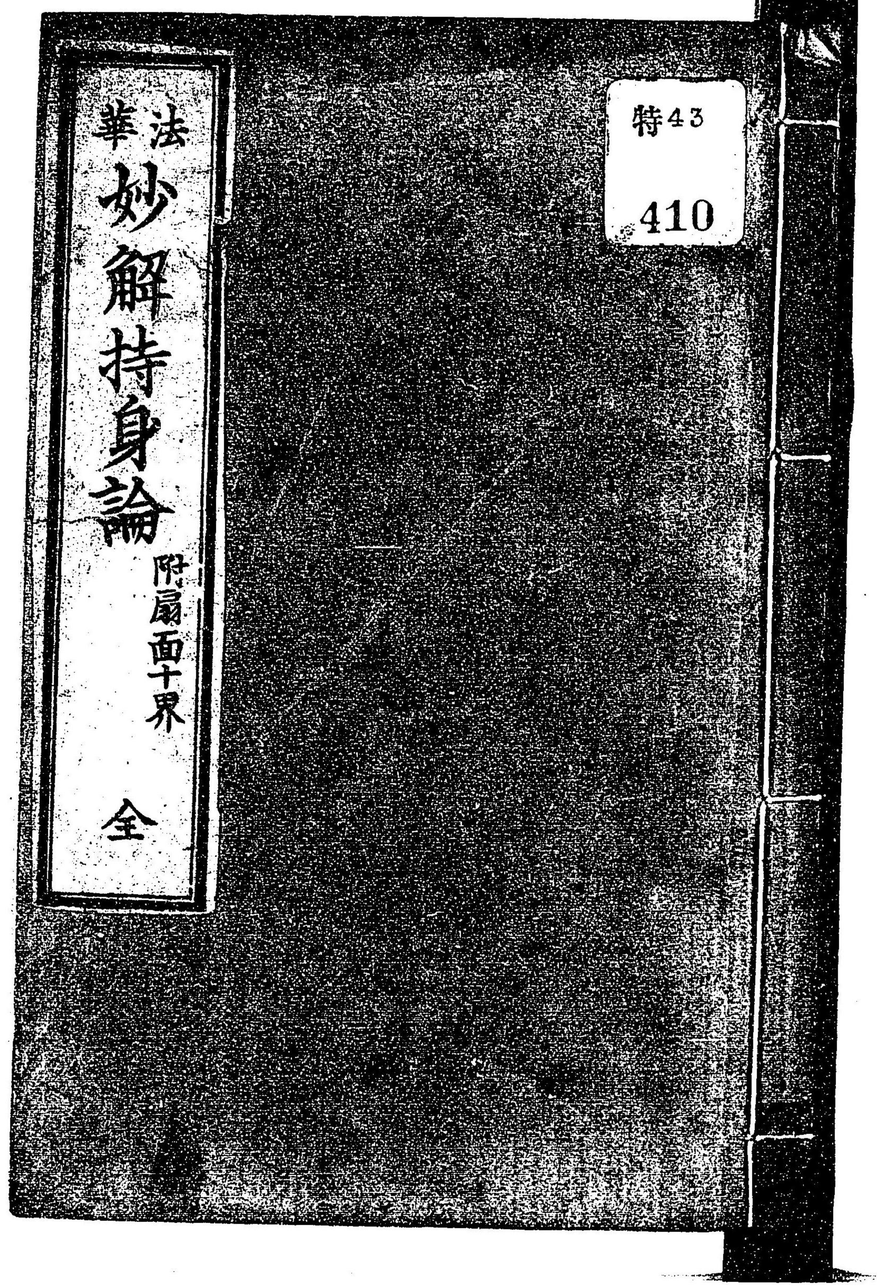


特43
410

020138−000−3

特43−410

法華妙解持身論

高橋　安右衛門／著

M15. 10

ABH−0352

特43
410

淀 迫 力

明治十五年八月

黄高稽法之志

石邑信相書

妙解持身論自序

方今文明の世ニ佛道を謗ーる者を開化と思ひ信ずる者を蒙昧と思ふこと譬へバ諺ニ所謂喰ず嫌ひと云ものゝ如き好く物ハ善ゝ好かざる物ハ惡しと云ふ其好かざる所以んハ經ホ曰以ニ惡業の因緣不聞三寶の名と夫れ佛と ハ解脫と云ふ義なり其故ハ教主釋尊諸法を妙と解リ其妙法衆生の心法ニ具リ一念の内ニ納リ即衆生の色心俱ニ常住不滅の理を示ーし玉ふ其御德を十號ニ ほめたゝ佛世尊と崇るなり世ニ諸藝ともニ其道を解脫て第一等の人と成るゝバ其道の世尊なり佛道ハ三世ニ亘りて無上

道なり其教主なるゞ故ゝ釋迦法王とも佛世尊とも云然るを佛法ゝ意味を知らずして漫ゝ嫌ふ者ゝ聊其理を知らしめ妙法の浩遠なる事を解き説の如く身を持ち吾人共ゝ無上醍醐の圓味ゝ饗ん事を念願すと云爾

明治十五年八月

大法結社　髙橋　某識

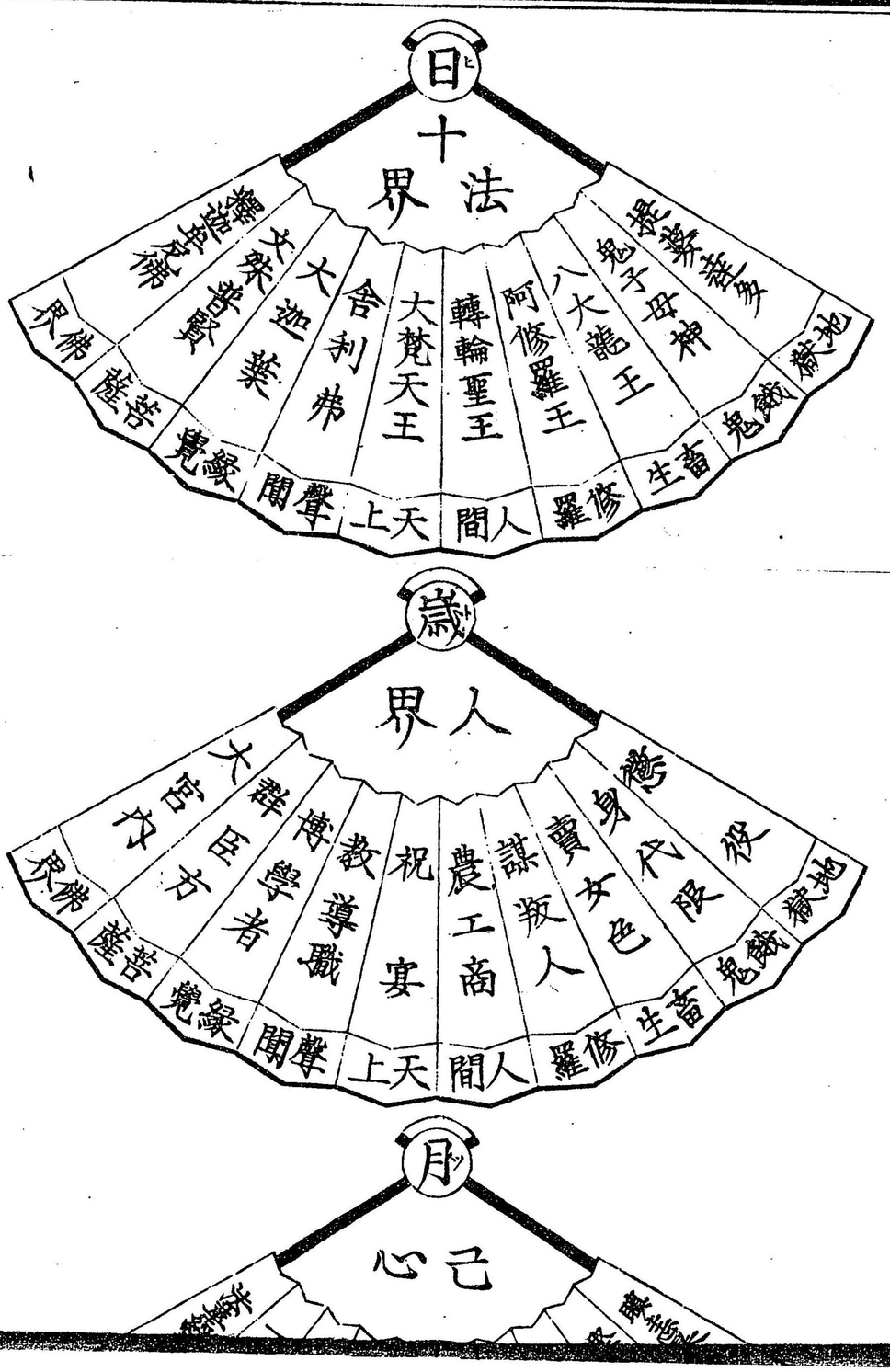
人あり来て門戸ゝ立ち張置し妙法講の札を見て直ゝ内へ入て問て曰く此妙法講の札ハ何故ゝ張置や主人答て曰く妙法の廣大なる事を互ゝ相講じ且つ教師を請待して説教を聽聞し邪教邪師ゝまどはされぬやう社を結び印しあり曰く結社と云へバ社長あるべし誰なるぞや答て曰く不肖なる客の曰く社長とあるハ我が申ことをよく〳〵了解すべし看よや方今萬國交通宇内一家昔日の我國ゝ非ず日ゝ月ゝ駿々として開化文明の域ゝ進歩せりかゝる時節ゝ舊弊の佛道を持つあぞとハ實ゝ愚

かの至りあり　又佛道の極意ハ成佛と申して佛ニ成を目的とす　淨土ニ生るゝを無上ハ樂とゝ去其虛誕を信ず大切なる時間を費し布施と申して金錢を費やす事野蠻未開の甚しき者と謂べし實ニ論ニ絶へたり　向後虛誕の佛道を捨て、開化ニ進めよや懇ニ言ハ聞けれバ主人答て曰くろれハく思ひもよらぬ御諭しを蒙むるもはかふ私どもゞ持つとゝあろの妙法ハ仰の議とハ霄壤の相違にて即我が身をたゞつを妙法をたゞつと心得候あり　曰く我が身を持つを妙法を持つとハ如何答て曰く夫人ハ一已ニ小天地也地水火風の四大集りて一身を成し空大の心を以て自由ニ働きをあらしむ四大の一身ハ法なり空大の一心ハ妙なり　故ニ我が當體即妙法妙法即當體なり　問て曰く四大を法とハ如何答て曰く火ハ燒照すを以て行とし風ハ塵埃を拂ふを以て行とし水ハ垢穢を淨むるを以て行とし大地ハ萬物を生ずるを以て行とし四大の法の正しき事人の形ニて察すべし　問て曰く人の像を小天地とハ如何答て曰く頭の圓きハ天ニ象どり足の方なる地ニかたどり身の内の空種あるハ即是れ虛空なり腹の温なるハ春夏ニ法とし背の剛ハ秋冬ニ法り四體ハ四時ニ法り大節十二ハ十二個月ニ法り小節三百六十ハ三

百六十日ヨ法リ鼻の息の出入ハ溪谷の中の風ヨ法リ口の息の出入ハ虚空の中の風ヨ法リ眼ハ日月ヨ法リ開閉ハ晝夜ヨ法リ髮ハ星辰ヨ法リ眉ハ北斗ヨ法リ脉ハ江河ヨ法リ骨ハ玉石ヨ法リ皮肉ハ地土ヨ法リ毛ハ叢林ヨ法る斯かる天地ヨ等しき體を受くるが其德すゝ量りあれバ人ハ天地の主宰ありて天尊といへども人あんバ天ハ德を尊ぶもあり地廣大ありといへども人ハあらざるバ地の德をあらはすもあり森羅三千の諸法も人ヨりして其妙をあらはすあり又今日王侯ハ天道を勤めて國家を治め天下泰平ならしめ庶民ハ地道を勤めて種々の產物を豐饒ならしむ國土を安穩ならしむ故ハ貴賤上下ヨりかゝ家業ハ一人の勤めれども天地の德を萬人ヨあらはすが基本あれどもその道を法とし我が身を持つを妙法を持つといふ問て曰く其方のたもつ所の佛道ヨ成佛の義理ありや答て曰く成佛の極理々十界互具一念三千の法門ありこれ義ハ我等ごとき凡俗のたやすく說くことを能ハざる所ありて併しあるべし我ガ一分の覺りハ扇面十界と云ふを著述致し置き候へど御熟覽の上御出有べしと一冊の書を與へけるバ客其書を持ち

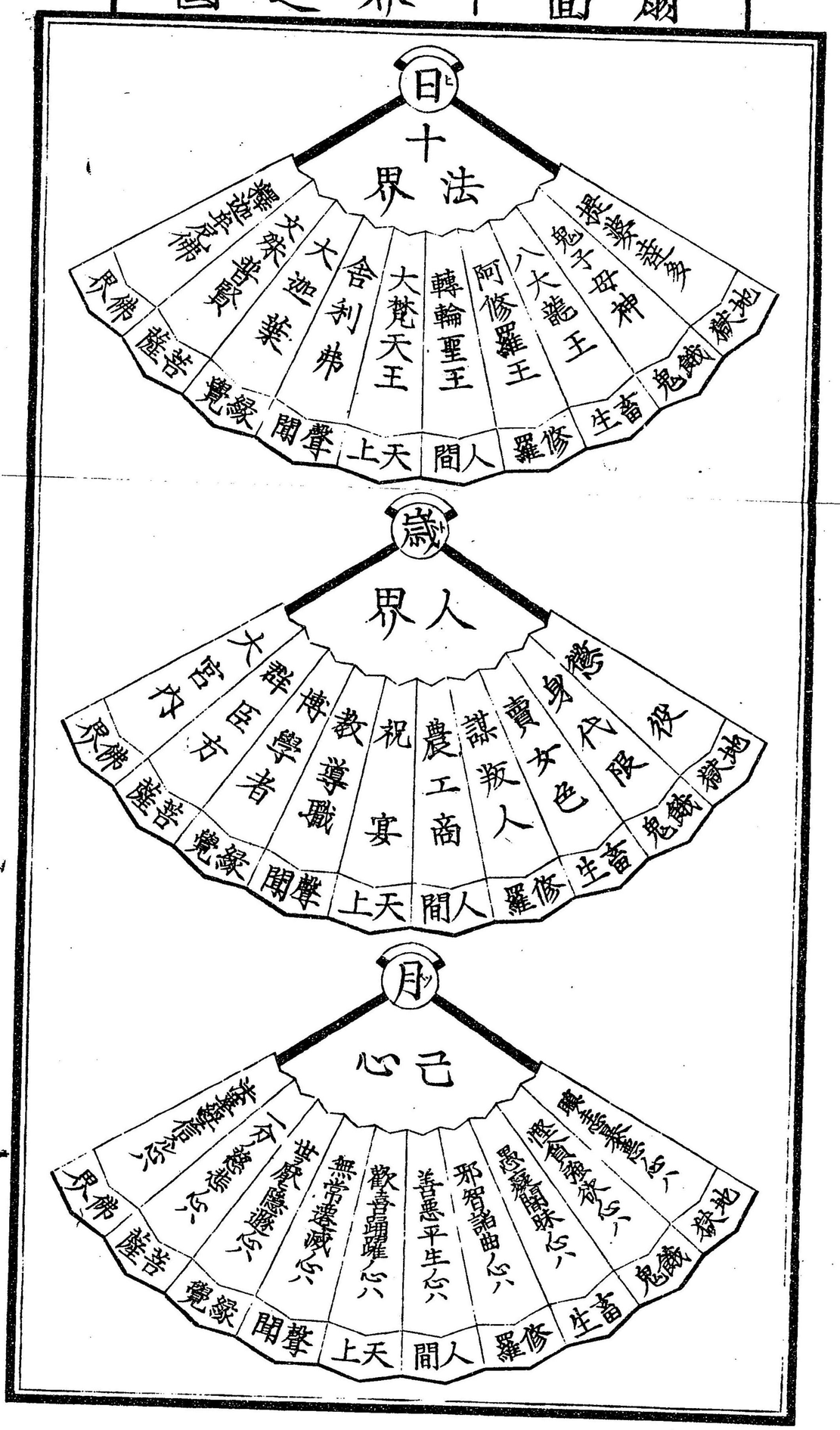
妙解待身論終

扇面十界之圖



妙解待身論終

扇面十界之圖



扇面十界

抑凡夫の一身無作の三身あることを能々ちゝろへれば萬法みふ三身ある謂れを知られ一塵一質ゑ心得らるゝあり三身とハ方便品の如是相應身如是性報身如是體法身なり譬へば扇の体ハ法身なり人ゑ扇と尊するゝ智恵ハ報身なり人ゑ用ふるゝて涼風を出し暑熱を凌ぐハ應身の慈悲なり是ハ則三身ゑ一身なり又壽量品の時我及衆僧俱出靈鷲山とハ已身の佛性疊みし扇の如くふる理の一念三千の十界を事の二念三千と開らき正像末曾有の大曼荼羅を顕ゑ末法下種結縁の輩正直捨方便

乃至不受餘經一偈と無二ふ信する故如我等無異の佛果顕はるゝ霊鷲山とハ圖に顕はす所の扇の像ちゝ又是を妙覺の山とも云ふ松野殿御書に曰く然るに在家の御身ハ只餘念なく南無妙法蓮華經と御唱へ有て供養し玉ふが肝心にて候なり夫れも經文の如くあらゞ隨力演説もあるべきか世の中の憂からん時も今生の苦しみさへ悲しくもんや来世の苦をやと思召ても南無妙法蓮華經と唱へ悦バしからんときも今生のよろこびハ夢の中のゆめ霊山浄土の悦びと共實の悦びなりと思召合せて又南無妙法蓮華經と唱へ退轉なく修行して最後臨終の時を御覧ぜよ妙覺の山に走り登りて四方をさつと見れバ七ツの面白や法界ハ皆寂光の土にして瑠璃を以て地とし金ハ縄を以て八道をさかへ天より四種の花ふり虚空ハ音樂きとへて諸佛菩薩ハ常樂我浄の風にそよめき娯樂快樂し玉ふぞや我等も其數ふつらなり遊戯し樂むべきことと早近付けりと云云右妙覺の山といふも霊鷲山といふも圖の扇の形ち要の輪の中を法性の淵底玄宗の極地といふかゝる目出度ところに至り法界の佛性とあるを法身宮殿に住そると云ふなり抑人界の佛界を觀ずるに

天照大御神の神孫ゝ〜て今日の
天照大御神の大宮内ゝり大日國土ハ萬國の首國ゝ〜て
常寂光土ゝり三種の神寶をいて四民を照〜玉ふこと日
月の光明の如〜三種の神器とハ一ふハ神璽則定ゝり神
祖を敬ひ奉り新嘗祭を行ハゝて五穀成就を祈り國民を
愛〜玉ふこと日の午時ゝあるが如〜誠ゝ御神璽の御
尊體ハ法身ゝ〜て世界の體ゝり御仁德を施〜玉ふこと
報身ゝ〜て如意寶珠の萬の宝を雨らせ〜如〜萬國すで
も御威光のまゝ〜輝やくハ應身ゝ〜て自然と明らかゝ
るごとく〜二つゝハ寶劔則戒ゝり天理を正〜ふ〜て人

の人たゝる五倫の道を明らかゝるべき事を志め〜玉ふ是
ゝ背くゝハ刑罰ゝ當て一惡を切て萬善を扶け勇德を
施〜て舊弊をあらため玉ふこと元品の無明を切る大利
劔ゝあゝずや三つゝハ内侍所則惠ゝり御政體の鏡を立
て、民を惠ゝ玉ふ御智德を仰ひで
皇上を奉戴〜朝旨を遵奉せ〜ゝること下たるゝハ下
ゝる道の鏡をみがきて上の鏡と照り合せ上下一和〜て
天下泰平の樂〜み是佛界の境界ゝあらずや
次ゝ人界の菩薩界を觀ずるゝ羣臣方の御勤ゝり時ゝ隨
ひ機ゝ應ド國ゝ警ゝある時ハ官兵を起〜て身命をゝげゝ

つを國民を安からしめんがゝめ又檢査をゝ〳〵諸業の怠たりを改さめ巡査をゝして非常を鎮め火難盗難を救ひ玉ひ其外種々の御勤めハ菩薩の六度万行の御修行とも仰くべきなり

次ハ人界の緣覺界を觀ずるハ博學者なり獨其身をつゝしんで世界を我々方寸の内ハ納め時至らバ權をとり時ハあるをさるをバ一生埋れ木とあるとも少しも悔まゞ花の散る月のかゝるを見て緣ハ觸れてハ事物の理を觀ず是緣覺ハあらびや

次ハ人界の聲聞界を觀ずるハ教導職なり夫教ハ孝へ導

びくの文あるを祖書ハ孝の德を賞して曰く孝と申ハ高ふり天高けれども孝より ハ高かゝゞ孝と申ハ厚ふり地厚けれども孝より ハ厚かゝゞ聖賢の二類も孝の家より出たり 如何ハいきんや佛法を學せん人知恩報恩無るべゝやと是說を聞て現世のとゝあゝず父母の未来すで盡すべき孝道を守る人眞の聲聞あるべゝ

次ハ人界の天上界を觀ずるハ祝宴なり神事の祭禮官員方の昇進農家の豐作工匠の棟上げ商人の笑壽講身分相應の祝事ハ遊興を催すとゝ都て天上界の樂しみハあらずや然るを遊興を常とゝ放逸ハ其身を忘るゝ者ハ還墮

三途として家を亡し身を失ふ誠に恐るべし慎しむべし

次に人界の人間界を觀ずるに農工商を色〳〵に家業を勵げむ農は四時に寒暑風雨を去のいで耕作を出精し穀相場のよろしきを樂ハばして人命の本と成を樂しみ工は手間賃の善し惡しにかゝハらぬ入仕事請負等の差別なく今日の業と出精し人の安く住せんことを樂しみ商は相場の高下を見込締賣締買等して利の多きを樂がハずして衣食住の其品々差支なきを潤澤するを樂しむ相互ひに五常の道を心懸ることを人の人とゝふべし

次に人界の修羅界を觀ずるに謀叛人ふり其德なくして其位に登らん事を欲し戒ひハ主家を奪ハんとねらひ人を倒して我身を立てんことを樂ひ只人に勝ん事のみを樂ふと雖ども天理に背ぐゆゑに終に我身を亡ぼすの惡事已に生出でゝ已に苦しかゝる是修羅なるべし

次に人界の畜生界を觀ずるに衒賣女色なり貞女兩夫にまみへぬとハ人道の常なり然るを身を賣りて恥とも思ハず却て其道を勤むる水賤女を働らきなさやうに見あるゝことを天理に恥づる所なり又恩を受けて恩を忘れ德をかゝむりて德を報ぜず家内不和合して親族殘害の苦しみ絶へざることを愚癡の至りなり鳩に三枝の禮

鳥は反哺の孝あり鳥つぜきまも恥べし〳〵

次は人界の餓鬼界を観ずるは家業不精身代限りあり高利を貸し禮金を請け其金故に借主の身代立ぬことを思ひあぶら高利をとるを樂しみとするを有財鬼といふ又濟を當てのあき金を借り身代限りを出だすを無財鬼といふかゝ淺猿敷あるを行くことと身の分限を知らずして奢りは長ト家業不精によるべし

次は人界の地獄界を觀ずるは懲役人あり上の御布告は背くゝの故は其次第によつて或ハ八ケ月一年三年十年其間の苦患思ひやるべし年限満ぢて赦免はあるを姿婆は出づるといふ又一生の間出づることあらぬハ謗法罪のあるきゆあり

斯かる眼前の十界を觀ずて法界の十界を察るべし三世といふも遠さはあらず昨日の過去は善きをもちを勤めてあけバ今日の現在安泰あり今日惡しき道を働らけバ翌日の未来安穏あらんよく世法を勤むる人即法華の修行ふあらぬや

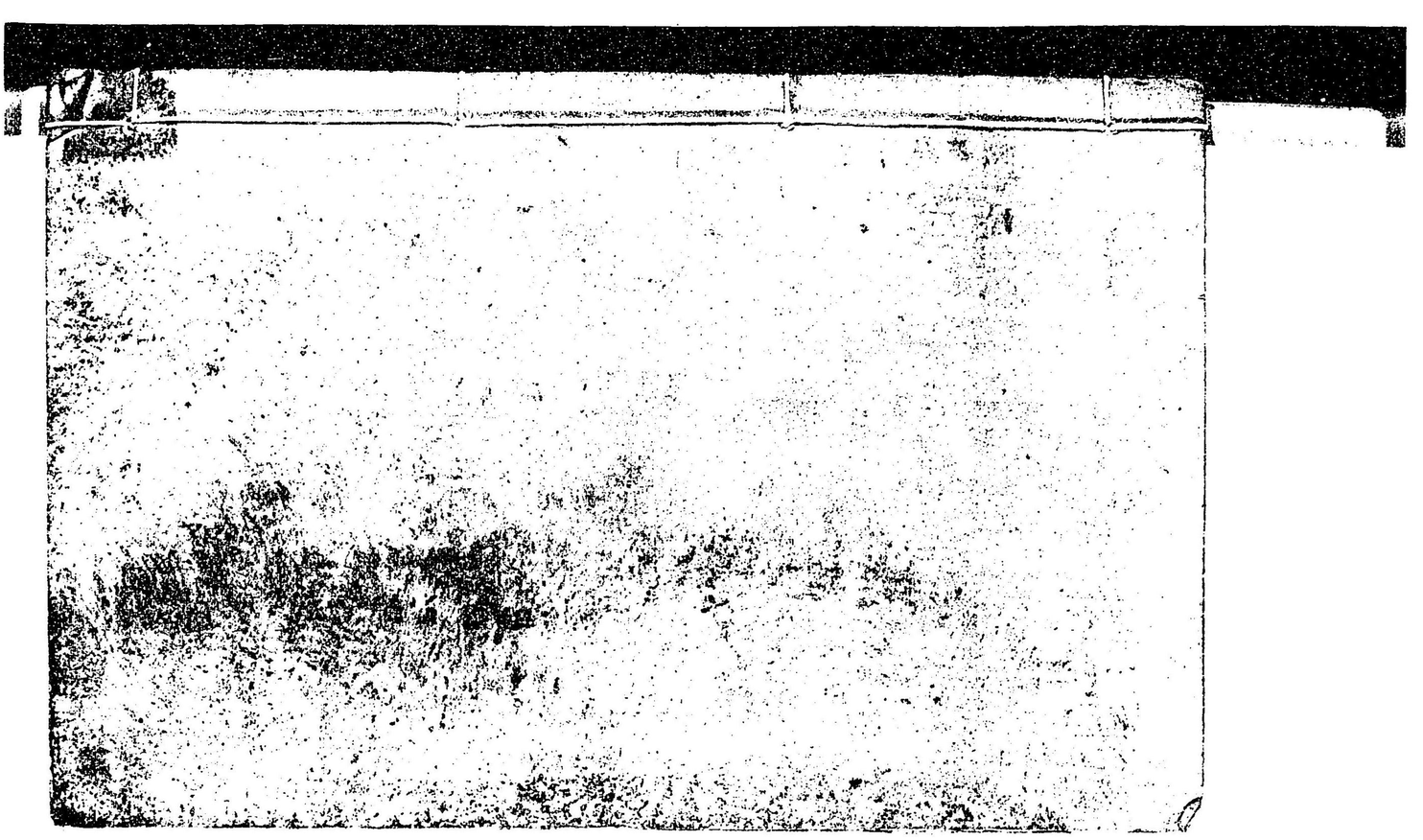
明治十五年九月廿六日御届
同年十月出版
著述並出板人　東京小石川區音羽町九丁目壹番地　高橋安右衛門

扇面十界終

附言

観心本尊抄に曰く一念三千を識らざるもの之を佛大慈悲と起し妙法五字の袋の内に此珠を裹んで末代幼稚の頸に懸さしむと夫れ意味も道理も識らずして御題目を唱ふるさへかくの如し況んや我が力に随つて能々其意味を解し辨まへて修行せば其功徳實に無量無邊なり然れども此經は甚深微妙なれば初心の行者最入り難く又解し難し爰に我が社長なる高橋安右衛門氏深く之を憂ひて此書を著し妙解持身論と名づけ如何なる初心の信徒なりとも我身三身即一の如来なる事を容易く心得らるゝ様先目の前なる人界の十界を示さるる所なる初心の信徒能々熟讀して之れ道理を察せば遂に法界の十界を感じて一念三千を得て如我等無異の佛果頭とるべし頃日社中に小教會を開らき此書を見せらるゝ且其理を示さるゝに實に宝山に登るの楷梯と云べしかゝる珍らしき書を社中而已に止むるも惜むべきなれば同志と謀て梓に上せ廣く是を施本し初心の信徒をして皆その理を解せし先此楷梯に登り昇りて妙法の極理を覺り即身成佛の域に至りなば唯に社中本意を達するのみならず氏

げ布教の志深く我輩をして其教の懇ある主意まも叶ふとゝふまでもあれバ蕪言を厭はず専婦女子の讀やすく解しやすくのらんことを樂ふ故ふ讀者假名字あり寸本あり軽賤して成佛得脱の道を失ふことなかるべき

大法結社惣代
小林秀城識

明治十五年壬午十月出版
東京音羽
妙法講　大法結社施本